

## 〈客家空間〉の生産 ——梅県における「原郷」創造の民族誌——

河合 洋 尚

東京都立大学人文社会学部 准教授

### 緒 言

本研究は、中国広東省の梅県<sup>ばいけん</sup>を対象とする民族誌である。梅県は、世界各地に居住する客家<sup>ハッカ</sup>という集団の原郷として知られる。中国研究者や華僑華人研究者の間では、梅県と聞くとすぐに客家を思い出すほど、梅県と客家は密接に結びついている。だが、筆者は梅県で長期間のフィールドワークに従事するにつれ、梅県を客家という言葉とア priori に結びつけてよいのか、次第に戸惑うようになった。特に1978年に改革開放政策（限定的な経済自由化政策）が施行される頃まで、梅県の人々には客家意識が欠けていたことがわかってきたからである。この地で調査をすればするほど、私は、梅県を客家地域「である」とア priori に決めつけるのではなく、梅県が客家地域「になる」プロセスを捉えていくべきであると実感しはじめた。そこで、フランスの哲学者であるアンリ・ルフェーヴルの「空間の生産」論を援用し、それを民族誌的手法としてアレンジすることで、梅県が〈客家空間〉として生産されていく動態を描き出した。

### 梅県——フィールドでの戸惑い

梅県は、広東省東北部の山岳地帯に位置する（図1）。

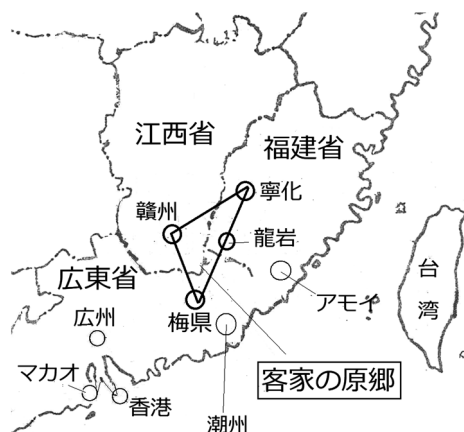


図1 中国華南地図および梅県の所在地（筆者作図）

香港やマカオに近接する広東省は中国では豊かな省の1つであるが、梅県は交通の不便な奥地にあるため、省内では相対的に貧困な地域であり続けた。それでも梅県が中国東南部や華僑華人社会で高い知名度を誇るの、そこが世界各地に居住する漢族集団——客家の主要なルーツの1つだからである。梅県の一部の人々は、とりわけ18世紀以降、香港、マカオ、台湾、東南アジア諸国、さらには南半球へと移住した。なかには、移住先で重要な政治的地位に就いたり巨万の富を得たりした人々もいる。公的な見解に基づく、梅県で生まれ育った住民はほぼ全員が客家である。そのため、梅県から海外に移住した人々は均しく客家と称され、梅県は客家華僑たちの「原郷」とみなされてきた。

学界においても、梅県を客家地域とみなすことは「常識」になっている。私がフィールドワークを梅県で開始したのは2003年であったが、当初は「梅県＝客家地域」というフィルターを通して現地を見ていた。しかし、私は、梅県に長く住めば住むほど、梅県と客家地域とを結びつけることに疑問を感じるようになった。たとえば、2004年のある時、私は梅県の郊外に出かけた。その住民は明らかに客家語を話していたにもかかわらず、自身が「客家ではなく漢族である」と主張していた。また、客家の文化について誇らしげに語る高齢者たちですら、後に聞くと、改革開放政策がはじまるまで、自身が客家であることをあまり意識していなかったのだという。

このような語り刺激を受け、私は、現地の新聞や雑誌で客家がどのように記載されてきたのか、年代ごとに調べてみることにした。その結果、1980年代前半まで、地元新聞において「客家」の二文字が見出しにでてくるのがほとんどないことがわかった。1980年代後半になると、ようやく客家に関する記事が増えはじめ、1980年代末には客家の文字が当たり前のように紙面を賑わすようになっていく。では、なぜ1980年代後半に梅県において客家の概念が注目され始めたのだろうか。



図2 円形土楼を模した華僑博物館（2016年8月、筆者撮影）



図3 團龍屋（2006年11月、夏遠鳴撮影）

それは、1980年代半ばに梅県の人々と華僑との交流が増すにつれ、華僑が梅県を客家の故郷とイメージしていることを、梅県の人々が気づきはじめたことに起因する。1980年代末になると、梅県では客家が重要なタームになっていった。

### 客家らしい〈空間〉の生産

このような歴史的経緯を知るにつれ、私は、「梅県＝客家地域」であると無批判に決めつけてしまう自身の偏見を反省するようになった。そして、梅県はずっと客家地域であり続けたのではなく、むしろグローバル市場経済への参入により客家の〈空間〉として生産されてきたのではないかと考えた。

〈客家空間〉の生産は、まず、地元政府と開発業者の手によって、1990年代以降に進められた。その一環として、梅県で増えたのが、円形土楼を模した建造物である（図2）。ユネスコの世界文化遺産に登録されている円形土楼は、1990年代に入る頃には客家の代表的な建築として中国国内外で知られていた。だが、円形土楼



図4 客家の文字を掲げた銀行（2012年9月、筆者撮影）

は、福建省西部から広東省東部の潮州地域にかけて分布する建築様式であり、梅県では歴史的に円形土楼は存在していない。梅県の主要な伝統住居は<sup>いりゅうおく</sup>團龍屋である（図3）。しかし、円形土楼はすでに華僑や観光客の間で知られる客家のランドマークであったため、梅県の政府や開発業者は、円形土楼型の建造物をつくることで、客家らしい〈空間〉を視覚的に演出したのであった。

21世紀に入ると、商人たちも〈客家空間〉の生産に参入した。私をはじめ梅県を訪れた2003年秋、「客家」の二文字を看板に掲げていたのは、主に観光客向けの飲食店や土産物店に限られていた。ところが、それから2010年までの間、客家の看板を掲げる店舗の種類が増え、銀行、パン屋、ゲームセンターまでもが、「客家」の看板を掲げはじめた（図4）。また、街角には「ようこそ、客家の首都へ」という表示が掲げられた。梅県が「客家の原郷」であることが、一目で来訪者に伝わるようになったのである。

### 住民による〈場所〉の保護・創出

梅県でフィールドワークをおこなうなかで私が最も注目したのが、民間の人々、特に地元の親族集団である<sup>そうぞく</sup>宗族である。宗族はかつて、團龍屋などの集合住宅で同居することが多かった。現在、宗族の成員は團龍屋の外の一戸建てやアパートに住んだり、広州市や深圳市などの大都市に出稼ぎにいたりしている。しかし、宗族の成員は、たとえ海外に出ても互いに連絡をとりあい、金を出し合い、互いを支え合ってきた。さらに、團龍屋を保存し、基金会をつくり、祝祭日になると團龍屋内部の祖堂で祖先祭祀などを催す宗族も多い。とりわけ春節、元宵節、重陽節などの祝祭日には、各地から宗族の成員が集まり、祖先を参拝して一緒に食事をとり、基金会に



図5 梅県の宗族による春節の祖先祭祀 (2011年2月、筆者撮影)

一定額の寄付をおこなったりする (図5)。

宗族の人々にとって、祖堂を内設する囲籠屋、および墓地は、一族の紐帯を保ち、祖先の功績を記憶にとどめる、かけがえのない〈場所〉である。ところが、梅県では近年、都市開発の波が押し寄せ、囲籠屋や墓地が取り壊しの危機に瀕している。これらの〈場所〉がなくなるとは、宗族の歴史記憶を喪失し、親族の紐帯を弱体化することにつながりかねない。そのため、いくつかの宗族は、囲籠屋や墓地を守るため、〈客家空間〉を生産する政策的動向と歩調を合わせる道を選んだ。具体的には、囲籠屋や墓地での祭祀活動を客家文化の名のもとで開催し、囲籠屋が客家文化の特色に溢れた歴史建造物であることを主張しはじめた。さらに、文化遺産の言説を導入することで、彼らの建造物と祭祀活動を有形・無形の「客家文化遺産」として保護する運動を展開し、それが梅県の観光化にも有益であると唱えた。それにより、梅県のいくつかの宗族は、草の根から〈客家空間〉を再生産するとともに、祖先から伝えられた歴史記憶やしきたりなどを残すことに成功した。

## 結 論

梅県には太古の昔から客家がおり、彼らが特色ある文化を形成し、客家文化に溢れる魅力ある地域をつくりあげてきた、というのが現在の通説である。私はこの通説を、生態学的アプローチと呼んでいる。それに対して本研究が明らかにしたのは、梅県の人々が客家というターム

と結びつけられたのはそれほど古いことではなく、特に民間社会に浸透したのは1978年の改革開放政策以降だということであった。中国の各地は市場を対外開放してから、華僑や観光客を誘致し、外資を獲得する必要性に迫られるようになった。そのため、各地が特色ある〈空間〉を演出し、外部の訪問者を惹きつける魅力を創出するようになった。こうした動きのなかで梅県が選択したのは、この地を〈客家空間〉として生産することであった。つまり、〈空間〉を生産するという力学により、梅県の人々、物質、民俗は客家と結びつけられていったのだ。私はこのような——通説とは逆の——プロセスを、空間論的アプローチと呼んでいる。

本研究は、梅県を主要な対象としているが、私がさらに関心を抱いているのは、梅県の事例から得られた空間論的アプローチが中国全土、さらには中国以外の地域にどこまで適用可能かということである。他方で、梅県の事例から明らかであったのは、このような〈客家空間〉生産の力学は、特定の国だけにとどまることなく、グローバルなつながりによって生成されているということである。梅県における〈客家空間〉の生産を解説するにあたり、中国研究／華僑華人研究という区分を設けることは、理解の妨げにしかない。梅県は、中国の一地域としてではなく、グローバル・ネットワークが交差する領域として位置づけられなければならない。したがって、私は、中国南部と同時に、東南アジア諸国やオセアニア、ラテンアメリカでも調査を進める必要性を実感している。今後は、特定の地域枠組みを超えた、グローバル・ネットワークの調査研究を、さらに進めていきたいと考えている。

## 謝 辞

この度、大変栄誉ある三島海雲学術賞を賜りました。三島海雲記念財団の皆様、選考委員会の先生方、本書の出版を手がけ推薦くださった風響社の石井雅社長に心より感謝申し上げます。また、これまでご指導いただいた先生方、フィールドワークでお世話になった梅県の方々にも、厚くお礼を申し上げます。

著者紹介



河合 洋尚 (カワイ ヒロナオ)

1977年 神奈川県生まれ  
2009年3月 東京都立大学社会科学部研究科博士課程修了  
2009年3月 博士学位(社会人類学)授与  
2010年3月 中山大学社会学与人類学学院 助理研究員  
2010年3月 嘉応大学客家研究院 客員准教授  
2013年9月 国立民族学博物館研究戦略センター 助教  
2017年4月 国立民族学博物館グローバル現象研究部 准教授  
2021年4月 東京都立大学人文社会学部社会人類学教室 准教授

専門分野：社会(文化)人類学

客家と呼ばれる漢族集団を研究している。これまで中国広東省の客家地域を拠点としてフィールドワークを続けてきたが、今後は、環太平洋各地に移住した客家の研究も深めていきたいと考えている。